

# 火星

平成二十六年九月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

羽蟻とぶ夜の陶狸のうす笑ひ

赤き月ぐらりと出でし一夜酒

土用照してぶかぶかの寺暈

内陣の闇のしりぞくお風入れ

谷落しの獅子の子が宙土用干

方丈の蟬ぐぢぐぢと鳴き損ぬ

おしぼりで目鼻烟らす盆の僧

遅おその迎へ火に蟬鳴きにけり

米櫃の中ひんやりと盆会かな

蓑虫を詠む蓑虫の顔知らず

# 太白星

杉浦典子

蘇鉄咲いて堺の刃物研ぎが来る  
蘇鉄咲いて父の墓なき父の里  
白磁器の窓の風鈴鳴りにけり  
風のなき夕べ風鈴鳴り始む  
夏うぐひすいくたびも語尾跳ねあがる  
夏うぐひす円柱に手を当てて聞く  
ボルシチと大きスプーン夏来る

浜口高子

湧水の絶えざる音の神楽殿  
大櫂日雀の声が日をこぼす  
種浸し八方の山朱に染み  
蛙鳴くたび田の面のふくらめる  
更衣門浪の音を近うせる  
まつ白な雁皮が桶に水鶏啼く  
空に傷なき鬼百合の背丈かな

# 火星作品

山尾玉藻選

石垣の反り夏蝶を吹きあげし  
宝塚蘭定かず子

山畑は風無きところほととぎす

風渡るとときくさいろの鮎の川

滴りの遙かなる音刻みけり

三伏の風に散りたる鮠の影

適塾へ夏至の溝蓋鳴らしけり  
八幡大山文子

烏賊釣火旅寝の髪のごはごはす

雲梯のつつ立つてゐる白雨中

まくなぎや昼を眠れる猿田彦

まくなぎに築の瀬音の立ちのぼる

青田風畳に枕へこみゐる  
宝塚山田美恵子

笙の音にはじめありけり梅雨曇

六月の風に降りきし鳶の羽

雨あとの通天閣に來し香水  
御持たせの蛸のたいたん祭笛  
朝ぐもり乳こぼしつつ歩む牛  
山椒魚水におくれて動きけり  
山椒魚ちちははの顔知つてをり  
緑青の風流れぬる墓の恋  
弥陀の灯にゆれてゐるなり蛇の衣  
縁側へまはつてきたる梅雨の貌  
郭公や手水にめがね濡らしたる  
湧水の音のほかなき大櫂  
一瞥のあとの気がかり蠅取紙  
朝ぐもり定家葛のかくもつる  
峰雲へ真向ふあかさ杖の音  
下闇の地を這ふ定家葛の香  
梅挽ぎしさわぎの跡を掃きにけり  
真昼間の菜穀の嵩や引けば鳴る  
草の上には鱒のむくろや夕立風

大和郡山城 孝子

八幡坂口夫佐子

宝塚山本耀子

# 選のあとに 山尾 玉藻

石垣の反り夏蝶を吹きあげし 蘭定かず子

石垣を駆け上る風に乗った夏蝶の景を風を主体にして詠んだ。「反り」の一語で石垣も蝶の動線も美しい湾曲であったことが知れる。黒揚羽なら白々とした石垣とのコントラストが美しい。

まくなぎに築の瀬音の立ちのぼる 大山 文子

石組で川瀬を狭め簀を張る築瀬は流れを絞り込んだような音を立てる。まくなぎの群れにその瀬音が巻き込まれ、いよいよ煙るようなひびきとなつて作者の耳に届いた様子である。

笙の音にはじめありけり梅雨曇 山田美恵子

笙の演奏は耳鳴りが不協和音となつたようなひびきで始まり、耳に馴染むまでにちよつと間が要る。中七までの措辞はその感覚を述べずして述べてなかなか巧み。「梅雨曇」も不即不離。

朝ぐもり乳こぼしつ つ歩む牛 城 孝子

乳を零しつつ歩む牛の姿は哀れで気の塞ぐ景。今日の暑さを予兆させる「朝ぐもり」がその景をいよいよ鬱とする。

縁側へまはつてきたる梅雨の貌 坂口夫佐子

玄関からではなく縁側へ廻つて来たのは作者にとつてごく心安い人物。折しも梅雨の最中、何時もの見馴れた顔からもどこか気の塞ぐ様子が窺えたのであろう。「梅雨の貌」が明快。

下闇の地を這ふ定家葛の香 山本 耀子

下闇の中、地を這つて漂う定家葛の花の香をどこか冷やかで妖しく感じたのだらう。鬱とした木立の昼の闇が、藤原定家の墓をびっしりと覆つたという葛の花を不意に想起させたのだ。

草川の草に禾立つ 夏 祓 深澤 鱻

イネ科の茅や芒の花を包む殻の針のような突起が禾。草々の禾が光を帯びる水辺の川社で形代が流されるのだらう。大きく動き始めようとする季節を細やかな禾に捉えてこころ優しい。

花苜蒲観てきしバスの湿りかな 小林 成子

実際にバスの中が湿っていたわけではない。雅やかな花苜蒲を巡ってきた落ちついた感受性がそう思わせたのである。

花嫁の胸の海芋の震へをり 河崎 尚子

花嫁が抱く海芋がこまやかに震える景。張り詰めた純白の海芋が花嫁の瑞々しい胸中をものがたつてゐる。ものだけ、事実だけを描き出す面白さは俳句と言う単純な詩形の独壇場である。(以下略)



同人一

奥田順子

# 恒星圈

伊勢きみこ

夏つばめ庫裡の柱に刀傷  
桂昌院寄贈の庭や苔の花  
寺宝観しあとをゆつくり夏料理  
夏足袋の仲居は料理ささげ持ち  
青すだれかかげて庭を見せにけり

長田曄子

生あらばけふ米寿の賀半夏生  
合歓咲いて遺影米寿となりませる  
干梅を返せし指の太かりき  
黒揚羽たゆたひ舞へりなつくやう  
定年の一年残すと心太

大山文子

俳聖殿の裏へ回りしサンガラス  
遠雷や喪主の喉の黒真珠  
観音の千の手真直ぐほととぎす  
玉虫を出すセルロイドの筆箱  
淡竹炊く雨脚つのりきし日暮

垣岡瑛子

雨戸繰る音の二階の明易し  
ところてんいまさら名前など聞けず  
一夜酒皆につられて買ひにけり  
金魚玉葬式に知る齢かな  
抹香の座敷小暗し夏つばき

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

水蓮の花増えてみし句座のあと  
片かげの鍵屋の辻へつづきぬし  
海紅豆の色をゆかしと思ふ町  
蜻蛉の生まれし朝七七日

涼野海音

マシユマロの中の空気やこどもの日  
青空へ曲がりつつ滝落ちにけり  
男子校の声の聞こゆる網戸かな  
捕虫網探鳥会とすれ違ふ

藤田素子

ダービーの始まる頃や金魚玉  
白南風や墓地の向かうの花梯梧  
天井の龍の睨める真昼の蚊  
福耳のひとと来てゐる菖蒲園

西畑敦子

供へたる芍薬の香に寝つかれず  
枝折戸を出で麦秋の真只中  
溝浚へ裏へまはつて行く気配  
粥を吹く口のいつまで朝ぐもり

石井耿太

口元に反骨ありしはだし下駄  
尊採る媪に暮の泥みけり  
百間を売りしもどりの鱧の皮  
見知り顔せぬ目高ども妻の留守

林範昭

断りの言ひ訳ながし走り梅雨  
アマリリス大門少し開けてあり  
夏風邪やよどみに浮かぶ黒き羽根  
井戸蓋に鬼瓦据糸梅雨曇

上原悦子

金閣寺の水面の金を水馬  
止り木の孔雀の背中西日射す  
あづき色の吊橋渡る梅雨出水  
龍のやうな参道マップ日の盛